

立山芦峯寺の布橋灌頂

前田速夫は、古代から、多分縄文時代から連綿と続くところの、日本民族のシラ信仰というか観念について、「白の民俗学へ・・・白山信仰の謎を追って」（2006年7月、河出書房）という本を書いた。その著書に基づいて、私は、彼が指摘する『納戸という聖なる空間「シラ」』について論考を加え、[「奥の思想」との関係から納戸「しら」のような聖なる空間は「奥まった空間」と呼ぶこととした。](#)

その論考では、納戸「しら」との関係に焦点を当てて「奥の思想」の一部を紹介したが、「奥の思想」の全体については、[山地拠点都市構想（前編）の第3章第1節](#)をご覧ください。「奥の思想」は国土づくりにおいても大事な思想であるというのが私の主張である。「山地拠点都市」では、深山に繋がる「奥」という空間を念頭において宗教軸（祭りの軸）を考えねばならないが、現実には、すでにそういう地域構造が壊れてしまっているので、なかなか難しい問題であるかもしれない。それこそ「知恵」を働かせて、深山に繋がる「奥」という空間というものを何とかつくり出していかなければならないのである。

その国土づくりにおいても大事な「奥の思想」の源流を訪ねていくと、どうも古代から、多分縄文時代から連綿と続くところの、日本民族のシラ信仰に辿り着くらしい。前田速夫の「白の民俗学へ・・・白山信仰の謎を追って」（2006年7月、河出書房）を勉強してそう思う。前田速夫は、どうも古代から、多分縄文時代から連綿と続くところの、日本民族のシラ信仰については、納戸「しら」のほかに、「沖縄や伊豆諸島に伝わるしらの神」ならびに「立山芦峯寺の布橋灌頂」のことを「白の民俗学へ・・・白山信仰の謎を追って」に書いているが、ここでは「立山芦峯寺の布橋灌頂」を以下に紹介することとした。

久高島のイザイホーでは、井泉で身を清めた白衣に白鉢巻きの8人の初めて神女になる女たちが、七つ橋を踏んで中に入って籠るところから始まる。七つ橋は俗なる世界から聖なる世界へ渡るためのもので、シラ山の前に渡される「無明の橋」と酷似している。この久高島のイザイホーと同じような擬死再生の儀礼は、立山芦峯寺の布橋灌頂という「[女人](#)

往生の儀式」にも残っている。布橋とは娑婆の閻魔堂と立山の地獄にある姥堂とを隔てる三途の川に架けられた橋の名で、現在は、富山県風土記の丘の施設の一つとして、欄干の赤色も鮮やかに復元されている。しかし、本来の布橋はシラの世界に渡る「無明の橋」であり、現在のような赤色の鮮やかなものではない筈である。仏教の影響を受け、さらに観光施設の一つとなって様変わりしているのは残念だ。式のあらまは、次の通りである。

秋の彼岸の中日、全国から集まった女性信者は、閻魔堂で懺悔したのち目隠しをされ、白衣に笠の死装束で行列を作り、引導師に卒いられて、幡、天蓋を持つ衆僧に伴われて、布橋まで進むと、対岸の姥堂の方から来迎師と衆僧が迎えにきて、白い布を三本敷いた橋を渡って、姥堂に導かれる。中に入るのをやはり「浄土入り」と言って、扉が閉められると中は真っ暗で、目隠しをはずすと、66体の姥尊が恐ろしい形相をして睨んでいる。長い勤行が終わって、真正面の戸が一斉に開かれるや、まぶしい光とともに前方に聳える立山の霊峰がめに飛び込んで来る。浄土の出現である。

この立山芦峯寺の布橋灌頂は、立山信仰の最大の行事であるが、これを含む立山信仰の詳しい説明は次のホームページをご覧ください。すばらしいホームページである。

<http://www2.ocn.ne.jp/~tomoyal/>

では、ちなみに立山そのものの様子をご案内しておこう。富士山は一生のうちに一度は上るべき山だと言われるが、私は、立山もそうだと思っている。

立山さまざま

[立山の登山口・芦峯寺界わい](#)

(一泊してゆっくり見て回る価値があります)

[弥陀が原](#) [五色が原](#)

[立山カルデラ](#) [地獄谷その1](#) [地獄谷その2](#)

[滝景色](#) [カルデラ内の池](#)

[雲](#) [山を彩る植物たち](#) [山の木立](#)

[立山登山](#) [立山黒部アルペンルート](#)